

上皇や法皇がなぜ、盛んに熊野詣でを？

天皇の座にある者への威庄

林教授が
講義 「英語観光ガイド育成事業」



林教授

新宮地域職業訓練センターで13日、明治大学の林雅彦法学部教授による講義「熊野の歴史と文化」が行われた。この講義は新宮市主催の熊野地域「英語観光ガイド育成事業」第1回講義で、受講者だけでなく一般にも公開された。

林教授は「聖地といえど、苦行、滅罪、再生。それが聖地と呼ばれる所にあるような気がする。死者の追福、延命長寿、熊野はそういうふうなものと最たるもの」と述べ、自然に対する畏敬・崇拜、宗教者の活躍、政治・経済の影響を説明。「聖地としての熊野は政治経済・文化に至るまで、大きな発信の場であるとわかる」と話した。続いて、古事記、日本書紀、万葉集に出てくる



講義を聞く受講者と一般

熊野、平安時代の熊野詣でを物語る増基法師「い

ほぬし、藤原宗忠「中右記」、藤原定家「熊野御幸日記」でみる鎌倉・室町時代の熊野詣でを紹介。上皇や法皇がなぜ、熊野に盛んにやって来たのかについて、林教授は「いま天皇の座にある者に対する、ある種の威庄があったんじゃないか。熊野の神様を担ぎ出すというふうなかたちになっ

る」と推測した。

講義では、義太夫の「十三間堂棟由来」、近松半二他「傾城阿波の鳴門」巡礼歌、落語「三枚起請」を収録したテープを流したり、熊野牛王（こうおう）の鳥（からす）文字の数はいくつかと問うたりすることも。参加者は、メモを取るなど熱心に受

講していた。

熊野牛王の鳥文字は、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社ともに最初は75だったが、のちに本宮92、速玉48、那智75となり、現在は本宮108、速玉88、那智70、書かれていると説明した。

H21年6月16日
紀南新聞